



啓 真 館

啓真館と土蔵

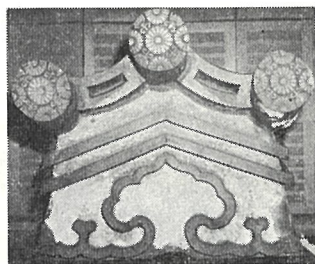
竹 内 力 雄

新図書館建設に伴いこの八月初めから啓真館、聚芳館、それと車庫の西側、校友会事務所との間にあった土蔵が撤去され、その跡地が、長い都の様々な遺蹟を秘めている可能性の故に発掘調査が行なわれた。これについては他日公表されるものに待つことにしたい。さて聚芳館は大正十一年、当時の同志社中学の教職員と父兄の一体となった努力と協力によって生まれたものであって、教員は二人一組となって父兄を歴訪してその協力をあおぎ、建設資金は悉く父兄たちの寄付によってまかなわれたものであった。聚芳館のことはこれにとどめ、今はここに、啓真館と土蔵の在りし日の過去に触れて、地上より姿を消したこの二つの建物への追悼と愛惜の意とした

い。

八月五日土曜日、朝には未だ姿のあった土蔵が屋すぎにはブルドーザーの下になっていくではないか。もうもうたる土ぼこりのところに駆けつけてみたが、鎧瓦も鬼瓦もどこにも姿なく、ブルドーザーのうなる中から一枚だけ鎧瓦を拾い出した。写真のものがその唯一つ残ったものである。……その後、撤去される建物の記念となるものを若干同志社に残してもらったのが、啓真館大棟東側にあった獅子口と鰐、懸魚、車寄降棟の獅子口と正面破風にあった菊の御紋章の飾金具等である。

土蔵は、冷泉家の西にあった同じく公卿の藤谷家のものであろうかとの話しもあったが、(同志社時報第十三号所載、「同志社歴史散歩、同志社周辺」小野則秋氏の一文参照)昭和十五年六月同志社が買受けた三百五十坪ほどの藤谷家の地所は間口今出川に面して冷泉家の西十八間弱であり、これは大体今度の新図書館工事用自動車出入口の東の築地塀の終りのあたりまでであって、土蔵はこの築地塀の西側にあったのであるから、藤谷家の土蔵ではあり得ないことがわかる。これは同志社が啓真館のあった地所、建物を買受けた時



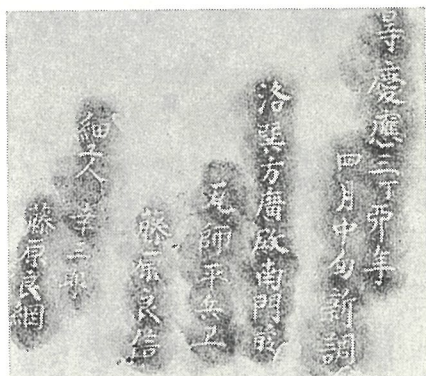
↑写真(1)

写真(2)↓

からそこに土蔵があったということである。

そこで啓真館とその地所のこ

とであるが、ここは明治初年まで、清華の家
旧徳大寺及び武家伝奏竹内家の在ったところ
である。ところで明治の新政によって公卿、
諸侯の称は明治二年六月の行政官達によって
廃され、旧華族制度が生まれる端緒となり、
明治十七年七月の華族令によって旧華族制度
が確立してゆくのであるが、その間明治四年
七月廃藩のことが行なわれた。これより先明
治新政府は新華族の東京集中を計るのである。
これらの華族は明治四年の華族に賜った
勅諭の意を体せんと明治七年六月華族会館を
東京に創設する。京都在住の華族たちもこれ



に応じて明治七年
九月旧一条邸に華
族集会所を設け、
やがて明治九年十
二月東京の華族会
館と合併し、分局
と称した。この集
会所、分局は当初
あちこち移動した
ようであるが、こ
の合併の頃には烏
丸今出川東の旧徳
大寺邸に落ち付いたものと思われる。華族の
勉強会がここで行なわれ、山本覚馬はその講
師の一人であった。降って明治十三年後半、
烏丸丸太町東にあった旧閑院宮邸の表門と車
寄を拝領し、移築と修葺が当時の二千元近く
を要して行なわれたようである。その後明治
三十七年四月華族会館が法人組織になるに際
して、分局を分館と改称し、さらに降って大
正六年七月よりこの分館の改築が行なわれ、
大正七年十二月八日に、華族会館分館（これ
が同志社の啓真館である）が五千円の思召金
を含めて当時の五万円を要して落成した。だ



写真(3)

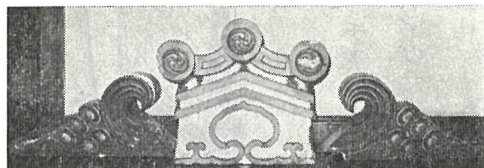
が昭和二十年八月の敗戦は華族制度を消滅さ
せ、華族会館分館は霞会館分館と名を改めた
のである。ところで同志社はこの土地建物の
譲渡方を敗戦をさかのぼること十年間に二回
交渉したが成立せず、敗戦後直ちに第三回目
の交渉をもったが、昭和二十一年一月「貸与」
なら可能とのことで交渉中、昭和二十二年七
月連合軍によって接収されてこの話は沙汰止
みとなっていた。この接収は昭和二十七年六
月に解除されるのであるが、これよりさき同
志社は昭和二十五年に大学院修士課程を設
け、その充実拡充を迫られていたが、ここに
校友会の首導によりこの霞会館分館譲受の交
渉が昭和二十七年六月初めに成立したのであ
る。土地約千四百六坪、譲受当時の建物延約
四百八十五坪、内、啓真館部分約三百三十坪、
千五百万円で三年にわたって支払いがなされ
たのである。譲受前二ヶ月ほどは賃貸契約が
なされ、月額十五万円であった。かくして同

志社によって啓真館と名付けられ、以来この八月まで二十年間、同志社大学、特に大学院のためにその使命を果たしていたのである。

さて写真(1)は車寄降棟の獅子口（下端巾六十五センチ）であって経の巻には浮線綾菊の閑院宮家の紋がつけられている。そして上部



↑写真(4)

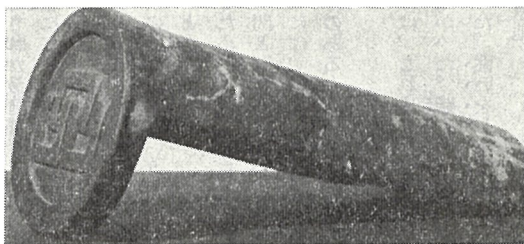


←写真(5)

に写真(2)のような銘がしっかりと文字で切られている。元治元年のいわゆる京のどんどん焼の折、閑院宮邸も消失したのであるからこの銘にある慶応三年に車寄が造られたものと思われる。車寄破風中央にあった、更に姿の良かった獅子口は残されていない。写真(3)は啓真館のどこかの降棟の獅子口の破片の銘の拓本であって、明治十三年の移築や修葺時のものであることがわかる。写真(4)は啓真館入口に掲げてあった樺一枚板の板額で昭和三十四年校友会長村田竹次郎氏の筆になるものである（たて六〇センチよこ二〇〇センチ）。写真(5)は啓真館大棟東端の獅子口（下端巾七十二センチ）と鰯で随分大きいものである。さて再び土蔵のことであるが「雲上明覧大全」によると徳大寺家の紋は窠紋であって、写真(7)の鎧瓦にみえる三つ盛組角紋はその合印である。この土蔵がいつの頃のものであったかは不明であるが、明治十三年当時と考えられる華族会館分局時代の図面上の土蔵とは位置が合致するがこれは南北に長く描かれ、撤去した土蔵は東西に長かったのである。しかしこの図面は寸法を正確に縮小したものでない、あるいはこの図面上の土蔵すな

わち撤去した土蔵とも考えられる。

土蔵のあったこのあたり旧徳大寺邸附近は昭和二十二年発行の「京都市史地図編」中の「嘉永七年大火図」や「孝明天皇記巻五十一」安政元年四月の「実久卿記」等によれば嘉永七年の京都大火、また元治元年の蛤御門の変の大火にも消失をまぬがれたようであるから大正七年の華族会館分館改築当時手をつけられなかったとすれば、土蔵と鎧瓦は場合によっては百二十年以上前のものといえる。この図面で興味をひくのは九坪ばかりの女工場が設けられていることである。



写真(6)